

—— 働きながら学ぶ青少年の未来と希望を育てよう ——

さん さん
燦々の太陽を求めて

(卒業生等の手記)

この本は、平成8年用お年玉付年賀葉書寄付金で作成しました。

財団法人 全国高等学校定時制通信制教育振興会

—— 働きながら学ぶ青少年の未来と希望を育てよう ——

さん さん
燦々の太陽を求めて

(卒業生等の手記)



この本は、平成8年用お年玉付年賀葉書寄付金で作成しました。

財団法人 全国高等学校定時制通信制教育振興会

燦々の太陽を求めて〈第3集〉

——働きながら学ぶ青少年を支援する手記集——

平成8年12月20日 発行

平成8年度 郵政省お年玉付年賀ハガキ等寄付金配分事業

発行者 財団法人全国高等学校定時通信制教育振興会
〒105 東京都港区虎ノ門1-12-5
電 話 03-3501-3933
FAX 03-3501-3944

印刷所 ハヤシ印刷株式会社
〒103 東京都中央区日本橋箱崎町18-1
電 話 03-3669-2644
FAX 03-3669-9936

—— 働きながら学ぶ青少年の未来と希望を育てよう ——

さん さん
燦々の太陽を求めて

(卒業生等の手記)

この本は、平成8年用お年玉付年賀葉書寄付金で作成しました。

財団法人 全国高等学校定時制通信制教育振興会

まえがき



財団法人 全国高等学校定時制通信制教育振興会

会長・元文部大臣

石 橋 一 弥

この手記集には、第一部に、祖国を脱出し、苦難の航海のすえ日本にたどり着き定時制高校を終えて大学に学んでいる人、中国からの帰国子女で、ことばの壁に悩みながら、定時制高校を経て大学を卒業した人、また、現代の豊かと言われながら様々な矛盾や辛い現象の多い中で、日本のみならず海外を旅し、彷徨しながら魂の遍歴を続け、今、民族芸能に打ち込んでいる人、また、過去の不登校を克服して通信制課程を経、思慮しつつ自らの道を歩んでいる人、あるいは、自分の志と体験を資本に社会的体験を重ね、大学の通信教育に新しい発見を求めている人などなど、様々な青春群像が生き生きと書かれていて、現代の若者の生き方の一端をかいま見ることができ、考えさせられるところが多いと思います。

第二部では、定時制、通信制高校を卒業して、社会で力強く活躍している方々の

信念、考え方、そして生き方が述べられており、若い世代の皆さんにとってよい指針となりこれまた学ぶところの多い手記であると感じています。

今なお、新聞紙上では、多くの不登校、中途退学、いじめ、あるいは麻薬などの問題が報じられています。人の一生は何ものにも代えがたく、この上もなく大切なものとされなければなりません。辛い境遇にあつて、迷い多く悩みの尽きない青少年の皆さんに、是非この手記集を手にとつて読んで頂き、心の糧として少しでもお役に立てれば幸いであると思います。また、若い人達だけでなく多くの方々にも読んで頂き、このように強く生きている人達がいることを理解し、身近に悩んでいる青少年を励まして頂けたらと願っています。

最後に、この書の発行に当り、郵政省から温かいご支援を賜ったことに心から感謝し、お礼申し上げます。

目次

[illegible]

I

ベトナムから日本の定時制へ

横浜国立大学学生……………ハ・トリ・ハイ 1

雪どけの花

立正大学卒……………小出絹子 11

手紙

京都嵯峨美術短期大学生……………大串洋子 23

通信制高校卒業生として振り返ってみた自分

[illegible]

勤労学生の道を歩んで

富山県立雄峰高校専攻科学生…………… 菜原照美 42

拝啓
大学生の私より

立命館大学学生……………小林竜太郎 52

定時制高校が与えてくれたもの

国学院大学栃木短期大学学生……………阿部里美 60

歩き続けるということ

近畿大学（通信制）学生……………樋口太 69

知らないでいるより、知る喜びをもとめて

神奈川県短期大学学生……

荒井頼子

79

北高通信制での思い出

松江市森脇病院勤務……

池谷昌平

87

憎悪なるべきものへの飢えと渴望

立正大学学生……

高橋加奈

92

II

定時制高校に学んで

埼玉県羽生市長……

今成守雄

103

目標に向かつて

大学附属病院副看護婦長……

扇谷智加子

109

出会いを生かして心を作る

守屋徽章代表取締役……

守屋進

113

三人の先輩との出会い

会計事務所勤務……

遠藤扶美

128

我が道をゆく

島根県警察本部刑事部長……

伊藤寛

136

坂の向こうに

秋田市役所職員……

皆川琴恵

152

四十代からの挑戦チャレンジ

宮島観光船フェリー船長……

丸本好正

162

私と定時制

墨田精工長野工場勤務……

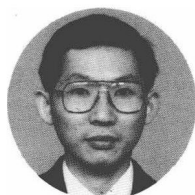
五十川義雄

171

あとがき……

苅田敏夫

ベトナムから日本の定時制へ



ハリー・トリ・ハイ

一九八九年三月八日昼頃、強い熱風が吹いている南中国海を老若男女約一七〇名の乗客を乗せた一隻の小さな漁船が力強くマレーシアの方向に向かって南下し続けていた。私はその乗客の中の一人であった。私は三人の友達と共に、自由を求めてベトナムを脱出する為に、その漁船の乗員となったのであった。

私たちの漁船はベトナム海上警備隊の注意を引かないように、三月五日の夜中に密かに出航した。翌日の朝には、もうかなり大陸と離れた。波が強くなったせいとか、それとも疲れたせいとか、私はひどい船酔いになった。これまでは船に酔うことはなかったのだが、おそらく、国境を脱出するので万が一捕まったらという恐怖感と、この先は一体どうなるのか、いつ上陸地に着くのか、果して上陸地まで生きていら

れるのかという多くの不安を抱えていたからであらう。長さが僅か十七メートルの漁船なのに一七〇人も乗せていることは、どれくらい超過積載になるのか私にはわからないが、もはや船に乗っている感じではなく丸木船に乗っている気がした。そしてその座席とは、船倉に一人一人が膝を曲げて詰めて座っている場所のことであった。そこはもともと魚を積む所であるが、今は我々にとつて大切な片隅であつた。(魚にしてみれば、いつのまにか人間と同格になつたということである。) ずっとそのまま座っていると、足が痺れて立ちたくても立つことができなかった。もつと辛いことは、私の座る場所は船の後方で低くなつてゐるため、波が覆おおつてくると頭から足の先まですぶ濡れになつてしまうことであつた。船酔いも一層ひどくなつた。雨具を被かぶつてそのまま寝るしかなかった。このような悪条件の航海で、皆は心身共に疲れ切つていたに違いない。しかし、それでも一人一人の心の中には自由に対する憧れが溢あふれていたのである。

航海の二日目は少々慣れてきたので、船酔いもかなり抑えられた。私は甲板へ出て新鮮な空気を吸い込んで体調を整えた。前日と比べると、かなり元氣になつた。周囲を眺めると、広くて果てしない海上には、ただ一つ私たちの小さな小さな漁船

だけで他には何もない。なぜ他の船が見えないのか、方向を誤って国際航路を離れているのかと心配したが、とりあえず、公海に出られたことは間違いない。ベトナム海上警備隊や海軍に捕まらず幸運であつたと安心した。今思うと、この亡命の旅のさなか、最も心が穏やかであつたのはこの二日目の時であつた。体力がある程度回復したこと、ベトナムの海域を離れて公海に出られたこと、そして、この日の海が一番静かであつたことによるためであらう。海面は鏡のように平らかで、それは海なのか、湖ではないのかと思うほどであつた。海は、静かな時は、実に優しく穏やかなのである。

この日私は、海と空の風景を楽しみながら、将来の希望を夢見て楽しい一日を過ごした。まさかこのような状況下に、そんな余裕があるのかと疑問に思われるかもしれないが、ここまで来た以上もう後戻りはできないし、人生にはどんな苦境にあつても常に希望を持ち、樂觀的に考えることが必要なのだと覚悟を決めていたのである。夕暮れの海の景色はすばらしく綺麗であつた。夕陽に焼かれて真っ赤な顔をしている空と、黄金色となつた海面に、ただ一隻の小さな船。何と美しい絵画であらう。夜の海も別に恐ろしいことはない。小波が船と衝突する時、海水中の夜光虫

が、数えきれないほどの無数の星と化した。一瞬、海は空と逆転し、どこが空か分からなくなった。夜の海は神秘とロマンが溢れる。私は漁船をベッドにして、波の子守歌を聴きながら、いつしか眠りに就いていた。

航海三日目の朝七時頃、一隻の小さな漁船と出会った。男女と子供五、六人がいて、タイの漁民家族に見えた。私たちは、もしかして彼らは海賊ではないかと警戒したが、彼らは私たちに遭った瞬間、極めて敏捷な動作で錨いかりを上げて、逆方向へ逃げてしまった。その時私たちの遙か後ろに一隻の大きな貨物船が現われた。タイ人の漁船がその船に何かの信号を送り、まもなく、その船は私たちの船に向かってやってきた。私たちは救助を求め、その船に近づいて行つたが、突然誰かが「共産党の船だ」と叫んだ。と同時に私たちの船の船長は全速を上げて、その船から逃げ出した。しばらく走ると、驚いた心も少々落ち着いてくる。そしてある人はその船の本当の船籍がわからないのに逃げる必要はないと反論したが、もはやその船も遠くへ去ってしまった。この日はさらに厳しい事態に追い込まれた。食糧を用意する人に裏切られたためこの船に十分な食糧と水はなかった。水はもうそろそろ底をつく状態となつたので、ある人が皆にできるだけ節約しようと呼び掛けていた。しか

し、その呼び掛けた人は節約する必要がない様子であつた。水や食糧、特に加糖練乳、砂糖は一部の人に独占されていたのである。私自身は食糧を持つていかなかつたから友達から少し分けてもらったが、この先のことは予測できないので少しだけ食べた。このような事態の中ではできるだけ節約しなければならぬからこの時の食糧は命と考えてもよいであろう。この日私は先のことをいろいろ考えて心配になり、あまり元気でではなかつた。いつのまにか私の近くにいた一人の少女が食事をつくり始めた。そして思いがけないことに、彼女はそのできあがつた食事の半分を私に勧めた。その時私は彼女の厚意を丁重に断つたが、彼女は私が受け取るまで、是非受け取つて下さいと何度も繰り返した。本当に彼女の温かい心に感謝した。しかし、非常に残念なことに、彼女はその後の事故で命を失つた。人間の中には、公的なものを独占し私物化する者、不当な手段で金持ちになつた者、或いは権力を持つて人をいじめる者が多くいる。しかしながら、彼女のように自分の大切なものを他人に分け与えようとする者もいるのである。金持ちだから、権力者だから偉い人だと言えるだろうか。人間とは一体何を求めているのだろうか。物質なのか、心なのか。

八日の正午頃、私が数人の友達と先のことを話し合っていると、遠くに一つの黒い点が現われた。しばらくそれを眺めていたがあまりに遠すぎて何であるか見分けることはできなかった。もしかするとどこかの船かもしれないと思ったが、あまり興味は持たなかった。また、自分たちの話題に戻った。約三十分経過した後、その黒い物体はだんだんと近づいて来た。そしてついに船であることが分かった。しかし、まだまだ遠いから、どこのどのような船であるかは、まだ分別することができなかった。その時は皆も気づいて、救助してくれるだろうと期待していた。救助してくればとても有り難い、救助してくれなくても水と食糧をもらい、方角を教えてもらうだけでも本場に助かる等等、議論が沸き起こった。しばらくすると、その船はもう私たちの目の前にやって来た。とても大きな船であった。私たちの漁船よりも何十倍も大きいのではないかと思った。船の前部に「日精丸」の漢字とローマ字が書いてあり、さらに操縦室の壁には大きな日の丸が描かれている。私は隣の人に「これは日本の船に間違いない」と言った。「本当か、お前」と彼は聞き返した。私たちが話しているうちに日精丸はもう止まって私たちを待つ姿勢をとった。これを受けて私たちの漁船は日精丸の前から回って左舷へと接近していった。そし

て日精丸はタラップを降ろし、一人の船員が私たちに回れと指示した。漁船が日精丸の後方に回った時、波に押され舵にぶつかってしまった。即座に漁船は転覆した。その時甲板にいた私は、衝突の力を受けて海に放り出された。そして私と死の神様との戦いが始まった。三時間余り、大時化の海で一生懸命泳いだ。海水は冷たく、波は高く、隣にいた人が力尽きて沈んでいくのを見た時は、恐怖感が全身を走った。いつか自分も彼と同じように沈んでいくだろうと思った。しかし幸いにも私は日精丸の救命ボートに助けられた。今思えば、あの時の朝食が泳ぎ続ける力になっていたのかもしれない。結局、一七〇人余の乗客のうち、救助されたのはわずか三五人であった。私と同行した友人は皆亡くなった。ここで、私のベトナム脱出の旅は一段落を告げた。

救助された後、三日間、日精丸で過ごした。その後、下松丸へ移って日本に連れて来られた。日精丸でも下松丸でも船員の皆さんは私たちに温かく、親切だった。その時は今までの人生の中でも最高な時であった。将来の希望も夢も胸一杯になっていた。下松丸で九日間過ごして三月二十日午後一時、横浜港に到着した。そこでは、難民事業本部の方々の案内で一時庇護等の手続きを済ませ、午後六時頃、全員

バスで長崎の大村一時収容センターへ向かって行つた。初めて見た日本の風景はとも綺麗だった。特にオレンジ色の道路の照明ライトは私に新鮮な感じを与えた。三月の中旬であつたが、熱帯国から来た私たちにとってはとても寒かつた。大村センターへ入所した後、第三国への出国か日本での定住かという選択に悩んだ。当時先輩から、日本に留まらない方がいいと言われたことも大きなショックであつた。落ち着いたばかりの心は再び不安に襲われた。いろいろ考えた末、欧米諸国よりも同じアジアにある日本の方が相似点も多く、適応しやすいだろうと判断して日本での定住を決意した。この事は仲間の間でビックニュースとなつていた。三五人中日本に残つたのは四人であつた。大村センターで、もう一つ私の人生にとつての大きなできごととは、現在の妻との出会いである。彼女と知り合い、彼女も私の意見を受け入れてくれて、日本での定住を決めた。

大村センターで二カ月間過ごした後、東京品川区の国際救援センターへ移され、そこで三カ月の日本語教育と一カ月の社会適応訓練を受けた。ベトナムにいた時は戦後の混乱期で中学二年で中退せざるを得なかつたので、日本でも引き続き勉強したかつたため、センターを出た後働きながら勉強ができる嵯谷夜間中学校に入学し

た。中学を卒業した後、八潮高校定時制に入学した。うれしかったのと同時に、これからまた四年間やっていけるか心配であった。時々仕事で体が疲れ、もう学校は続けられないと諦め^{あきら}たくなる時もあったが、先生方や友達的情熱に支えられ、卒業を迎えることができたのである。

ベトナムにいた時、私の父、父の兄弟も皆教師で教育を大切にする家庭であったが、一九七五年以後の私たち兄弟、いとこの達の学校生活の断念はこのような家族にとつてきつと大きな事態であつただろう。勉学を続けられなかったことは、人生の大きな損失である。人間が教育を受けないことは、自分の人生だけではなく、家族、社会にも悪い影響を及ぼすのではないだろうか。私にとつて「夜学」があることは本当によかつたと思う。けれども、定時制だからと差別されたり通つてゐることを卑屈^{ひく}に思つたりすることを耳にする。しかし、四年間学校生活を続けることは、全日制で勉強するよりも大変なのだと思う。

幸いに色々困難を乗り越えて学業を続けられたことは喜びである。現在は横浜国立大学工学部二部で化学の勉強をしている。将来は大学で学んだ科学技術を祖国で活用して、社会の発展、国民の生活の向上に力を尽くしたい。また、今はできるだ